

つきいちアート9月は、開催中の企画展「大久保智睦-鏡映空間-」に関連して、作家の大久保先生と一緒に日本画を描くワークショップを行いました。

つきいちアート9月 日本画材に触れてみよう！ レポート

2017.9.3



背景は大きな刷毛で塗ります。

日本画は岩絵の具という絵の具を、膠（にかわ）という動物の骨や皮から取れるコラーゲンを接着剤にして、画面に定着させていきます。

講師の先生方が、膠で溶いてすぐに使えるように用意してくださいました。まずは背景を青と黄色と白の絵の具から好きな色を選んで塗ります。



最初の一筆は緊張します。



描き始めると夢中になります！

今回は、和紙を張ったパネルに、下絵を描いたものを用意しました。これを「骨描き」と言います。参加者の皆さんは、この骨描きに岩絵の具を使って色を塗っていきます。

今回は、大久保先生に加えて、現役の東京藝術大学生である岩谷さんと山田さん、また、大久保先生と一緒にお仕事をしている、彩鳳堂画廊の本庄さんが講師としてお手伝いくださいました。



岩絵の具は、溶かした膠と混ぜて使います。
中指を使って練るそうです！

日本画は、一色塗ったら乾かして、また塗っていくという繰り返しです。自分の好きな色、濃さになるまで塗って乾かし、塗って乾かし……。今日は時間がないので扇風機を用意し、風を当てて乾かしました。



「たらし込み」という技法も教えてもらいました。

「見たものをそのまま描くのではなく、自分が感じた色を描くんだよ、自分が思った色を塗っていきこうね」という先生のお話。自分の思い思いの色を選んで塗っていきます。



今回は、金箔ではなく真鍮箔を使いました。



思ったところに箔を撒くことができるよう、
空気の流れを読んで撒くそうです。



教わった技法は先生の絵の中にもあったかな？

参加者の質問にも丁寧に答えてくださいました！



鮮やかな配色がステキです。

最後に「砂子」という技法を使って、講師の先生方が、参加者の皆さんの絵を仕上げてくださいました。

「砂子」とは、砂子筒という、網を貼った竹の筒に金箔を入れ、細くなった箔を散らして画面を装飾する日本画独自の方法です。

描いた絵に合わせて、どこに箔を撒いたら良いか、大久保先生のアドバイスに合わせて、撒いてもらって完成です。本当は、完成した印に「落款」と呼ばれる判子を押して欲しいとのこと。いつか、篆刻などを作る機会があったら、ぜひ画面に押してくださいね！

本当は、半日や1日かけてじっくりやりたい内容でした。少し駆け足になってしまいましたが、皆さんそれぞれ素敵な作品ができあがりしました。

作品が完成した後は、みんなで諏訪市美術館へ。大久保先生と一緒に、展示している作品を観覧しました。絵の描き方から道具について、また、絵の解説まで質問を交えながら、詳しくお話しをしてくださいました。

参加者の方からは、「岩絵の具がこんなに鮮やかで綺麗だと初めて知って感動しました！」「また先生のワークショップに参加したい！」との声。日本画の魅力をも十分に味わうことができたのではないのでしょうか。

大久保先生、ご参加くださった皆さん、ありがとうございました！

本格的な日本画が完成しました！



ご参加くださった皆さん、ありがとうございました！